

知あるいは尺度 —— その 1 ——

“Intellect” or “Criterion” in Thought No. 1

呉 谷 充 利

始まりと洗練——始源と進歩——

人間のいわゆる知のはたらきには二つの意味がある。一つは、起源に戻るつまり元に戻ることであり、もう一つは、古きを新しくすることつまり今日的な言葉で言い換えれば迷妄を科学化することである。

われわれは起源に戻るいは古典にもどる時代と迷妄を脱してより明晰なものに向かういわゆる文明化の時代を歴史に画している。起源に返ることと迷妄の科学化はこの歴史の時間から見れば相反する。一方が成立すれば他方は成立しない。つまり二つの精神活動は矛盾する。

起源にみる一つの精神は新たに解釈し直される。われわれはこの解釈を幾重にもくり返して今日にいたっている。いわゆる歴史の進歩がそれである。科学はみごとにこの成果である。が、歴史は時に根本の意味を逸脱して本来の姿を失う。起源に返ることはこの歴史の修正ともいえる。

ソフィスト（詭弁者）からフィロソファー（愛智者）へ、天動説から地動説へ、ギリシアのアナロギア（類比）に由来するゼノンの逆理（「矢はあるく亀を追い抜けない」）からピサの斜塔におけるガリレオの実験へ、ニュートンの運動法則から、さらにアインシュタインの相対性理論（空間は歪んでいる）へ、架構式（柱と梁）骨組みからローマのアーチ式構造へ、西洋中世のゴシックの尖頭（先の尖った）アーチから近代の構造力学（鉄筋コンクリート構造）へ——こうした知の進化を押し進めたものは、一言でいえば知の普遍化たる文明の精神にほかならない。

いわゆる科学は、今日その地位を揺るぎないものになっている。知とは文明の精神たる科学である。まさにこの旗幟をもってわれわれの理想郷が日進月歩のその歩みのなかに築かれんとする感がある。

本当にそうであるのか。というのは一つの知の限界をさらなる普遍性へと代えるこの知の進化は、じつのところを見れば知の分化として現われている。つまり、文明の精神たる科学はじつは知の分化としてみずから成立しているのである。この知の分化群は群雄割拠のごとく覇を競う。あるときは進化論、あるときは天文学、あるときは熱力学、あるいはまた量子力学、さらには遺伝子学が突き進む科学のきつ先となって、知的パラダイムの支配的な原理となる。

こうした知の構造は、局所的な知の肥大化を招く。結果、全体的な知の均衡を欠くことになる。核分裂の原子爆弾の発明がそうであり、DNAによる生命体のコピーがまさにこのいい例であろう。科学にたいする一つの疑問が生じる。科学は万能ではなく、その限界をもちほしくないか。

いわゆる文明の精神にたいするもう一つの知が浮かびあがる。知の総合である。知の総合とは知の全体を意味する。この知の全体はどこに成立するのか。それはまさしく起源においてである。

そのことは言語について考えてみるとよくわかる。太古の人類のわずかなヴォキャブラリーはそのこと自体が多くの意味を現わしたにちがいないからである。驚き、喜び、悲しみ、痛みが似た声のなかに発せられたであろう。その

ことばは全体にわたっている。ことばのはじまりはこうしたことにある。

が、うなり声のような音韻が分節され、驚き、喜び、悲しみ、痛みの表現が区別される。音声は、さらに指示的なことばとして音韻的に弁別され、明確な概念をかたちづくる。弁別されたことばは人間に共有される一つの意味になる。が全体としての人間は依然として身ぶり、手ぶりを交えるもどかしさのなかにいる。言語の真の意味はこの起源において存在している。感情的にせよ、指示的にせよ、言語の発展とはこの起源が分化してゆくことである。

問題は、そうした言語の完成において人間的感情を欠いた言語の使用が起きることである。言語の分化ではなく、起源に戻る一つの理由がここにある。起源としての全体、発展的分化としての文明というこの二つのことがらは紛れもなく二つの標準、規準として存在している。起源に戻ることと文明へと進むことのこの対立は一体いかにして解かれるのであろうか。

古代派と近代派——西欧十七世紀末における論争——

ところで起源への問いと知の文明化というこの知的パラダイムがいわゆる「古代派と近代派の論争」として十七世紀末の西欧においてまさに問われる。これについて先達の研究を以下に参照しながら簡単に追ってみた。〔徳永恂編『社会思想史』所収 赤木昭三「フランスにおける進歩の概念 弘文堂 昭和五五」〕

論争のきっかけは一六八七年一月二七日、アカデミー・フランセーズの席上で朗読されたシャルル・ペローの詩「ルイ大王の世紀について」であった。古代の作家と当時の作家の優劣を問うたこの議論には、じつは人間の歴史を墮落と見るか、それを進歩とするのか、歴史にたいするこの二つの見方が対立して存在していた。

人間の歴史を墮落と見る「古代派」にはボワロー、ラ・ブリエール、ラシーヌ、それを文明の進歩とする「近代

派」にはシャルル・ペロー、フォントネルらがいた。簡単にいえば、起源の崇高さと文明の進歩という二つの規準がここに明瞭になっているわけである。起源への問いと文明化というこの人間社会の根本の問題は唯十七世紀末のフランス宮廷社会に見る文学的一関心事に留まるものではなかった。

参考文献

- 徳永恂編『社会思想史』弘文堂 昭和五 五五ページ。
 赤木昭三・赤木富美子『サロンの思想史』名古屋大学出版会 二〇〇三
 澤瀉久敬編『フランスの哲学』東京大学出版会 一九七五
Euvres de Monsieur de Fontenelle, des Academies, Francaise, des Sciences, des Belles-Lettres, de Londres, de Nancy, de Berlin & de Rome.
 Fontenelle, Bernard Le Bovier de, 1657-1757.
 A Amsterdam : Chez François Changuion, 1764.